

1996年

望月洋史展

余白の在処

represent 1987 - 1996

アスクエア神田ギャラリー

心の軌跡

望月洋史

ある日、アスクエア神田ギャラリーの伊藤厚美氏が私の個展会場へやって来た。ここで彼は、私の墨絵作品【魚達の所作1987~1996】の変遷展を、彼の画廊でやることを提案してきた。

「あなたの10年間の作品の流れを検証し、今後のステップへの良い機会にしたら」と彼は言う。彼の情熱に打たれた私は、その好意を喜んで受け入れた。

しかしまだ、先の話だろうと思っていると、数日後伊藤氏は急に我が家に押しかけてきて、夜中までかかって、1987年以前の作品を含めて、カメラに撮ったり眺めたり。話は学生時代の頃にまで及んだ。

次の日彼は電話で、私の初期から今日へ至るまでの作品を通じた心情告白を書いてほしいと強く言う。私は彼の提案にかなりの戸惑いを覚えたが、もう一度自己を見詰め直してみようと思った。

私が絵の道へ進もうと突然思いついたのは、高3も終りに近い冬の夜の炬燵の中で、漠然とジョルジュ・ルオーの画集を見開いていた時である。

それは、ルオーの絵もさることながら、解説に書いていた彫刻家、高田博厚の文章が艶めかしく、ルオーの世界に対する関係が、当時、空虚な感情を抱いていた私に多少の感傷をともなって、染み込んできたからだと思う。

美術学校では、ろくろく学校へも行かず、油絵もさほど描かずに、軽いスケッチばかりしていた記憶が残っている。当時、漠然と、美術は構築するものだと考えていた私は、ほとんど瞬時に出来上がる素描表現に飽き足らず、かといって油絵に向かうとなにもわからなくなってしまう自分に気付いていたが、構築性という西洋の概念は魅力であり、しかし構築が平板な図柄と化してゆくことに不安を抱いていた。筆の先には壁があり、委縮した世界が横たわっていた。

そんな時、たまたま2年間、教師と助手の関係で日常性を共有したのが、もの派のT氏であった。オウム真理教の教祖と弟子の関係が巷間を賑わしているが、この報道を見るにつけ、ふと思い起こされるのが、T氏のことである。

これがまさに青春の熱病というものであろうか。その2年間、日常を共にして、愛憎あいなかばした恋をT氏にしてしまったのかと思う。T氏は、私の軟弱な絵画観を、完膚なきまでに粉碎してしまった。

その時から私は、絵を描かなくなった。代わりに私が手にしたのが、8mm撮影機であり、ポラロイドカメラであった。〔現実〕の名のもとに行為と方法論が席捲し、世界は私の手に触れるかと思われた刹那さえ、私は故郷を喪失しているという思いを否定出来なかった。ポラロイドの写真の光沢は私の体内と釣り合うまでに重みを有しはしなかった。私はPointを打っていたのである。PointとPointの間に横たわる現実、あるいは日常性は私に、むなしい牙をむいた。

T氏の発する呪文のような言葉の数々は、難解ではあったが、時としてハッとさせられる言葉が身に染みわた。喧嘩もしたが、それは決まってidentityの危機に起こった。私は、T氏の作品よりも遙かに、T氏の言葉に注意を払っている自分に気づいていた。それが私の限界であったか。

ただ、T氏が美術担当をした舞踏家のT・M氏を撮影しており、T氏の張った白いテントが舞踏家T・M氏の裸体に巻き付くという行為の中に、まぎれもない美が存在したことを、今でも鮮明に思い出す。まさに、ここに行為があったのである。

私はこの、熱病のごとき数年間を過ごした、T氏と数人の仲間達のことを今でも生な感情なく思い出すことは出来ない。

助手を終え、私は別のところへ食い扶持を得た。T氏と会わなくなっただけの私は、絵画の喪失感を5年程、現実の活動で埋めた。

しかしある病気を切っ掛けに、もう一度絵画が顔を出した。摂氏40度の高熱が、1週間程続いた間ベッドの上で妄想のように絵画のことが頭から離れなかったが、そのことがより私を苦しめた。病気の快復からしばらくして、私は水彩画の個展を開いた。これは折に触れ描きとどめた、日常のスケッチである。墨を使用し始めたのは、その頃のことである。カニ殻や魚を意識的にモチーフとし始めたのも、その頃である。

2人展をやり、小品を並べてはみたが、どこかで絵画の喪失感は増大した。世界は未だ、私の方へ降りて来ず、小手先の器用さのみが筆の先で震えていた。私はある密度のままの大作を願った。

ちょうど河の流れのあちこちに微小な、しかも完璧なまでの流水形が無数に存在するように、日々の微かなとなみが、私の存在証明として集積されてゆく。一瞬の情感は、ひとつひとつに位置を占めながらその集積としては、混沌の中に身をゆだねる。

こうして、1987年より始まった【魚達の所作】は、ほぼ10年目を迎えようとしている。

頑ななまでに同じスタイルを継承し、矛盾はさらに拡がっているかとも思う。しかし、継続の中に自己を支える一条の光が灯り始めていると観じている。差異は継続の中にこそ現われはしないだろうか。

プラトンは「いわゆる学ぶと言うのは、まったく新しくなにかを知ることではなくて、もともと知っていることを、想起することだ」と言っている。

ここ数年私の頭の中に、二人の画家がいる。曾我蕭白と浦上玉堂である。蕭白のダイナミズム、玉堂の胸中山水は私を捕らえて話さない。この間の仕事の流れの中で、今後ますます彼等をプラトんに習って想起しようと思う。

1996・5・18 望月洋史

